訪問記

村のお年寄りの葉っぱビジネスから若者が移住したい町へ 挑戦し続ける「上勝町」

ひの・まちの生ごみを考える会　佐藤 美千代

葉っぱビジネスで有名な徳島県上勝町（人口約1500人）は、2003年に日本で初めてゼロウェイスト宣言を行い、ごみの45分別を実施してリサイクル率80%を達成した。

2013年には食品や洗剤なども量り売りする上勝百貨店が開店した。2015年には百貨店をおしゃれな量り売りとビール工場のお店「RISE & WIN Brewing Co. BBQ & General Store」にリニューアル。

2020年は、ゼロウェイストを国内外に発信する拠点として「ゼロ・ウェイストセンター」をつくり、ゼロウェイストを体験できる宿泊施設「HOTEL WHY」も整備した。

その中心となって活躍しているのは移住した若者たちだ。「上勝町にはどうして若者たちが集まり、時代を経てごみゼロのトップランナーでありつづけるのだろうか?」今回はその疑問を探るべく、福岡の友人と徳島に移住した当会メンバーを誘い、4月5日～6日、「HOTEL WHY」に宿泊して上勝町を視察した。

小水力発電

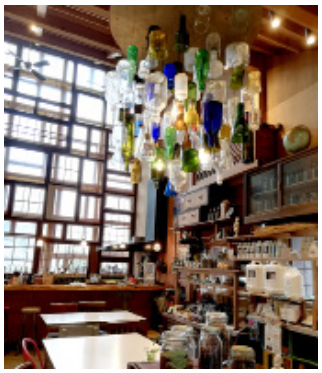
「一般社団法人 地職住推進機構」（囲み参照）理事で、ビール作り職人でもある岡本昌也さん（徳島出身）に、小水力発電と「RISE & WIN」を案内いただいた。

慣行水利権の用水路の取水口からの落差は33 m。水量は1秒間に3～4ℓと少ない。水量が少ないので落差を利用して勢いよく回す「ペルトン式水車」を導入。

オーダーメイドで費用は約100万円。徳島市内の再生可能エネルギーに関心のある工房に安価で作ってもらったそうだ。モーターは、防水でコスト的にも安価な洗濯機と同じものを使用。

南海トラフ地震で停電になったら過疎地の復旧は後回しなので、携帯電話の充電と街路灯を目的とし、利益は考えていないそうだ。取水口に溜まった落ち葉を掃除したりする管理は地元の方たちが行っている。

RISE & WIN Brewing Co. BBQ & General Store



中村拓志 & NAP建築設計事務所デザインの建物。（写真下）

木材は廃材や窓枠や机のリユース。椅子もベンチも家具もリサイクルで、空き瓶のシャンデリアが目を引く。（写真右）

RISE & WINでは洗剤やパスタなど日用品だけでなく、クラフトビールを製造してビールの量り売りも行い、ここでしか楽しめないおいしい食事も提供している。

この店のコンセプトは「リサイクルってカッコいい」を感じてもらうこと。廃棄されていた柑橘類の皮をクラフトビールの香りづけに使用し、ビールを作る過程でできた麦芽粕は、お菓子やグラノーラなどに再利用している。

庭にはバーベキューやキャンプができる場所も併設し、キャンピングカーに宿泊することもできる。

過剰包装をなくすことを目的とした前身の「上勝百貨店」は、町民の利用に期待するしかなく経営的に難しかった。もっと外部の人が訪れる観光としても楽しめるように進化させたRISE & WINは、多くの職人たちの手で試行錯誤しながら、ゼロウェイストの発信を行っている。

一般社団法人 地職住推進機構

上勝町より地域再生の要請を受けたベンチャー企業社長の小林篤司さん（徳島出身）が、町役場での勤務を経て2012年に発足させた。当時、上勝町の資源であるゼロ・ウェイストは、「ごく一部の世界」だけに認知され、全世界的に意義のある大切なメッセージが広く伝わっているという印象がなかったそうだ。そのため、若者たちにも魅力あるゼロウェイストを上勝町のブランドとし、経済と両立させた地域資源の活用と持続可能な地域づくりを目指している。

ゼロ・ウェイスト産業としては、下記の3つのプランを提案し、若者たちの雇用にもつながっている。

① 上勝サスティナブル・アカデミーの創設
② ゼロ・ウェイストブランドを利用した上勝百貨店の創設
③ 循環型社会に適合したエネルギー会社上勝エナジーの創設

上勝町の地域創生事業

野々山聡さんは、「合同会社パンゲア」を起業し、CEOとして環境共生型観光を目的とした「サステナブルツーリズム」事業を展開している。

宇宙飛行士を目指してNASAで訓練していたが、2011年に内閣府のインターンシップ研修事業で上勝町に関心を持ち、2016年に起業して移住。上勝町のブランドであるゼロウェイストと自然を「サステナブルツーリズム」を通して伝えれば事業になると、観光客、企業の新入社員研修、学校の修学旅行などを対象に、エコツアーや教育観光プログラムなどを行っている。今回の視察もパンゲアに申込み、希望する場所をコーディネートしていただいた。

「隙間産業として始めた葉っぱビジネスがスタートして36年目、(株)いろどりは現在156軒の農家で年間2億6千万の売り上げがある。上勝町は貯金が48億円あり財政的には豊かな方だが、人口1500人、高齢化率53%の限界集落で危機的状態。高校もないため、一般家庭に移住を呼び掛けても即戦力にはならない。

上勝町で事業をやりたい人を集めて雇用を生み、常に新しいことを発信して経済を回していくことが、結果的に上勝町が生き残る道だと考える。昨年初めて上勝町は人口が一人増えた。ソフト事業をメインとし、行政の資金をあてにせず、国の交付金をみて企画書を作成し、上勝町役場に監査をお願いしている。小さな実績を積み上げていけば大きな事業も任せてくれるようになる」と野々山さんは言う。

バイオマス利用の温泉宿

上勝町の「月ヶ谷温泉 月の宿」は、環境省の補助金を活用し、2004年～2006年「環境と経済の好循環のまちモデル事業」として、木質チップボイラーを2基、破砕機、ダンプトラックなどを導入した。

月の宿の職員の森本さんによると、オーストリア製のボイラーは2基で7000万円。プラントも含めて総工費は1億3千万円。木質バイオマス燃料を用いて温泉を沸かし、さらに給湯・部屋暖房等にも使用している。

チップは上勝町産の木材を使用し、チップ代は1日2万円とのこと。広葉樹の固いチップが良いが針葉樹も混じる。チップは自動点火などの調節ができ、オイルが高騰する今はチップ代の方が安価で助かっている。ペレットは、火力は安定するものの高価で、製造段階でCO_2を多く排出するため、チップの方がいいそうだ。

ゼロウェイストセンターと「HOTEL WHY」

私たちは、2020年にごみステーションをリニューアルした「ゼロウェイストセンター」を見学し、併設された「HOTEL WHY」に宿泊した。ここは「RISE & WIN」と同じ建築家が設計した建物で、ごみを建築資源としている。リユースの窓が特徴的で、床にはビンを砕いたガラスが練りまれている。

「(株)BIGEYE COMPANY」が指定管理者として運営しているが、ホテルの併設というアイデアは、宿泊設備があれば、町民以外の人が泊りがけで上勝の取り組みを見に来ることができ、ゼロ・ウェイスト体験を経済と両立させることができると考えたからだ。

ホテル外観

宿泊者は全員、30分ほどゼロウェイストセンターの分別についてレクチャーを受け（写真右）、その後にゼロウェイスト体験が2つ待っていた。石鹸は自分で使う分だけカットし、コーヒー豆と茶葉は使用分を量り売りで購入した。

部屋はメゾネットタイプで広く、木の香りがする素敵なお部屋。タオルとバスタオルはあるが、パジャマや使い捨て歯ブラシはない。部屋内では、6分別のごみを入れるケースがカゴに入っており（写真左）、自分のごみはチェックアウト時にセンターに分別する体験が待っている。

上勝町に移住した若者が動き出した

翌日はDVDで上勝町の取り組み紹介を観た後、「NPO法人ゼロウェイストアカデミー」の2代目事務局長を務めあげ、現在は外部の取材を受けたり、くるくる工房の運営に携わっている藤井園苗さんに、質疑応答形式で詳細説明を伺った。

上勝町はごみ処理として、1975年前後から1997年まで穴を掘って野焼きを行っていたが、全国的な意識の高まりから小型焼却炉を2基導入。しかしすぐにダイオキシン対策で使用不可となり、結局ごみ焼却炉をつくらずゼロウェイストの道を選択した。まずは生ごみの堆肥化に取り組み、生ごみ処理機の購入費補助制度をいち早く導入した。その結果

各家庭での生ごみリサイクル率は 98％に。生ごみの回収を行わないことを前提に、ごみの徹底した分別と持続可能な地域社会づくりを目指す。

上勝町は 2005 年に官設民営で町外より若い人材を迎えて「NPO 法人ゼロウェイストアカデミー」を立ち上げた。当初は行政と NPO 法人の協働で、ごみゼロに向けて活動してきたが、ごみの分別は町民にとっては面倒なので、当初は町民の評価は低かった。しかし、ごみの 45 分別や「くるくるハウス」開設など新しい挑戦に、次第に外での評価が高まり、環境に関心を持つ若者が注目することとなった。上勝町は、そんな若者たちに対して企業を紹介し、3 年間はそこで面倒を見るようにしているという。時代の流れで 10 年前くらいから力を持った若者たちが多様な組織を立ち上げ、事業を展開し始めた。現在は役所とそれらの組織が協議会を持ち、連携事業を行っている。

右は藤井さん・左は㈱ BIGEYE COMPANY CEO 大塚さん

上勝町のリサイクル率は8割を達成したが、残り2割は消費者の努力ではどうにもならないことがわかった。そこで 2020 年は、SDGs の波もあり、外に対してゼロウェイストを発信する運動に大きく方針を転換することとなった。サステナブルな社会を本気で実現しようと、すでに大手企業をはじめ、ベンチャー企業、他自治体との連携の話が進んでいる。

町民の多くは協力的だが、中には「5 億円もかけたゼロウェイストセンターで人が呼べるのか」とか「使い勝手が悪い」と言う人もいる。徳島市周辺のごみ焼却施設が建て替え時期を迎えており、広域化でのゴミ収集を望む声もあるという。

人口 1500 人で経済を回すことは難しいが、ゼロウェイストタウンというブランドを活かして、観光やエコツアーなどで町を潤すことができれば、過疎地の上勝町の未来にも期待が持てる。今後も上勝町の挑戦から目が離せない。